

たより第58号 目次

こころのかたち・去年・今年

西松 布咏

水面の月と水すまし

島 木綿子

赤坂浮世草紙の華と色

福岡 俊弘

雪は熱くて冷たくて

ヤリタ ミサコ

思考の地図

照沼 太佳子

平成二十年 公演他

一月一日 NHKラジオ深夜便

こころの時代 「三味線に託した半生 西松布咏」再放送

一月十九日(土)

本郷・朝陽館  
編集工学研究所・ハイパーコーポレ  
ーション・シーエムシー  
トニバーシティセミナー  
江戸ー日本の粋と野暮の間を体感する

司会・お話

松岡正剛

ゲスト

田中優子

花柳千寿文

西松布咏

二月三日(日) 三時より

岐阜・かわらや

第一回岐阜・粹艶会 初ざらい

演奏会および 親睦の夕べ

三月十五日(土) 一時より

横浜中華街・華勝楼

第三十五回美紗の会のことい

美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

三月廿二日(土) 十二時より

浅草・茶寮一松

春を味わふー落語・江戸の唄・

懐石料理のことい

桂扇生・西松布咏

七月四日(金) 六時半開場

四谷・紀尾井ホール

第一回純の会

森本純女一門 舞の会

万歳・菊の露・小簾の戸・

名護屋帯・ゆき

尺八 宮崎青歌

唄と三絃 西松布咏



こころのかたち・去年・今年

西松 布咏

新しい年は早朝のラジオで聞く我が声から始まった。昨年二月二日のNHKラジオ深夜「こころの時代」三味線に託した半生」の再放送である。ラジオの声は、遠く響く鐘の音をいまだ断ち切れぬ白い想いで聞く地唄「ゆき」から始まり、黒髪の結ばれたる想いを、積もるご存知で積もる白雪。と熱きこころを沈黙の墨色で塗り変える「黒髪」で結び、十二月七日のセルリアン能楽堂での「虹の会」への想いを秘めて「まだまだ見えてこない世界だからこそ光を求めて、一歩ずつ歩んでゆきたいと思えます」と健気に語っている。でも現実の舞台はそうはならなかった。六歳で始めた長唄の「松の緑」を松羽目を背に初心に帰って元気に唄い、芸の厳しさを知った古曲の富本節「田面雁露手枕」を中村明一師の尺八と共に語り、花柳千寿文師の舞と共に「黒髪」を。そして最後に西松文一師との出会いとなった地唄「ゆき」で我が半生を締めくくる「こころのかたち」を考えるといて構成した。私の中では我が芸の変遷を示すべく自然なかたちであったが、シャンルの違う唄なのでまさしく三つの細棹・中棹・太棹三味線との格闘が続いた。ある時は能舞台で一人ライトを浴びる姿を想像すると恐ろしくなり後悔の念にかられ、ある時は唄い終えて会心の笑みを浮かべ、多くの拍手に幸せな思いに浸ったり…と一言一憂しながらのひとり稽古は深夜に及んだ。

そしていよいよ当日。万全の思いで臨んだが、最後の演目「ゆき」で私の「こころのかたち」は凍てついた世界を描くことは出来な

った。

自分を彩る着物の着替えに気をこらわれ、最後の調弦を充分にせず、早くに舞台に三味線を手放してしまった。ひとりの間の中に置き去りにされた三味線は、やがて煌々とした月光のようなライトを浴び、手元にたどり着くまでの道は果てしなく遠かった。眩しい光の中で三味線を膝に置き「花も雪も払えば清き袂かな…」と唄い出したが、三味線の音は感情をなくした病人のようにつきり凍ってしまった。何度揺る動かしても狂った調子は戻ってくれない。夢の中では昔の幸せだった思い出の手紙がはらはらと舞い落ちてきたの…おれからはひとひらの雪ではなく、鋭い針が無数に私の身体に突き刺さる。

解説の為に最前列で観ていらした田中優子さんが「能舞台の布咏さんは一人で何かと戦っているように感じた」と後に語っていたが、まさしくあの時は、生涯を共にした愛しい主君を守る仁王立ちの弁慶のように絶望を必死でこらえる悲壮な我が姿だった。

「捨てた憂き、捨てた浮世の山かじら」と、かろうじて唄い終わったものの、昨年の舞台は消すことの出来ぬ苦しい思いの「こころのかたち」で終わった。



(森田拾史郎撮影)

新しい年になってようやくひとつ  
思いにたどり着いた。芸の道は半生で  
締めくくれるほど短くはないのだと。  
ある文楽の太夫が「生きているうちに  
は到底納得のゆく芸は語れまへん。あ  
の世でも唄っていつかおます」の言葉  
を思い出す。

まして私は生意気にも心の赴くまま  
に芸の変遷をし、三つもの三味線を共  
にしてきたのだから。舞台を見ていら  
した芸の神様が、もっと謙虚に精進せ  
よ！とお叱りの手紙を下されたのだと。

## 水面の月と水すまし

島 木綿子

「もう少しこっちへ来ないか？」と言  
う声にひかれて、呼ばれたのは自分だ  
ろうかと、恐る恐る水の上を移動し始  
めた水すましは、「そう、君だよ。もう  
少しこっちへ」と水面に揺れながら、  
優しくうなずく月の端につきましまし  
た。井の音に誘はせて樹木に、草に、  
地に、下りていく。

水面にさえ雨脚をつけない降りよう  
の雨は、夜気に吸われるように消え、  
空にも、地にも、川にも、清められた  
月の光が満ちるほどではないけれど、  
すべてに感じられました。水すましは、  
水の流れに手や髪を添わせて、休みな  
く唄う水辺の草たちに、新しい唄の詞  
を伝える仕事を持っています。

詞は巡り巡って吹いてくる風、時に  
は雨から伝えられ、時には両腕から伝  
えられ、時には両腕を広げて、懐の奥

深くから取り出した温かい光の粒子を、  
両手のひらから地上に撒き広げる太陽  
からも伝えられるものです。そして鳥  
や蝶達からも・・・。「いつも物語りを  
語る君の仕事を見ていて、いや聞いて  
いて、いつかこうやって君に話した  
いと思っていた。今日はその時だと思  
う。」

水すましは、月の声に耳を澄まし、  
心も澄まして聞き入りました。どれほ  
どか時がたち、水面から月が去り、水  
すましの姿も、深い闇の中に隠れてし  
まいました。流れに添う草の葉達の唄  
声も声を潜め、しばらくの時があたり  
に溶け込んでゆくと思われるその時、  
川上の静かな眠りをねむる竹の葉を濡  
らすように、月の光が細い糸、音の糸  
になって降りはじめました。わずかな  
樹木達のその呼吸に合わせて音はなび  
き、川の水を潜り出し、水はもうすく  
白々と明ける夜と入れ替わって、やっ  
て来る陽の光の予感をまどって、月の  
音の糸を潜り、ひきかえしを繰り返し  
その優しい動きを感じながら、一枚の  
桜の色づいた葉の上で、水すましは深  
い眠りから目さめ、月から聞いた新し  
い役目に取り掛かるべく自身に言い含  
め、周りに話しました。繋ぎ目のない、  
裂け目のない、まるで自然そのものを  
写す水の精を全身に秘めた声の持ち主  
が唄を唄う。水と風と光で織られた布  
のように、その人は唄する。  
今夜のその時には周りのみんなと聞  
こつ。そして新しい出会い毎にそれを  
伝えていく。その唄声がかたがた  
のあるべき姿、祈りの姿ということ  
を・・・

## 赤坂浮世草紙の華と色

福岡 俊弘

後者のほうから「リン」と声がした。  
「凍」であり、しかも「鈴」。照明を静  
かに落とした会場。舞台には浅葉克己  
氏の手による屏風。その屏風に下から  
柔らかな光が当てられている。そこ  
に向かつて、扇形に配置された客席の中  
央を「りん」とした声の持ち主がゆっ  
くりと歩いてくる。「淋」であって「輪」。  
小唄「年の瀬や」。会場の空気は、ふっ  
と「江戸」のそれへと入れ替わった。

昨年、暮も押し迫った十二月十二  
日冬至の日。『浮世の赤坂草紙』と銘打  
たれた、松岡正剛氏が師範を務める『連  
塾』第二期「絆走祭」の最終講が、赤  
坂草月ホールで行なわれた。冷たい小  
雨が着物の裾を濡らす中、詰めかけた  
ゲストの数は三百人余り。連塾過去最  
多の参加者数である。松岡氏のオーブ  
ニングトークは、オシリス、イシス、  
セト……と、いつものように知識の鉄  
矢が次々と放たれる。続いて、世界的  
にも名高いインテリアデザイナ、か  
の内田繁氏と松岡氏のトークセッション。  
漫画家、しりあがり寿氏の「二一  
クな世界を覗いたあとは、生命学者、  
清水博先生のわずか三十分だったが  
「世界一受けたい授業」(by 松岡氏)  
に圧倒される。

この流れ。この流れを受けて、いよ  
いよわれら師匠の登場である。客席後  
方から「年の瀬や」を口ずさみながら  
ステージへ歩を進める師匠。こんな素

敵な登場の仕方を誰が予測できただろ  
う。「……水の流れと人の身は止めてと  
まらぬ色の道……」。そして唄の最後  
には、なんと師匠の口三味線。会場中が  
一瞬にして魅了された瞬間だった。艶  
で華で色。



続いて、糸をつけての「新内・仇名  
草」。すでに気分は吉原、柳橋。そして、  
思わず「待ってました！」と大向こう  
さんを買って出ようかと思った(心の  
中でやりました)。「富本・田面雁露手  
枕(たものかりつゆのたまへん)」。男と  
しっちゃあ、これを聴いて心動かねえハ  
スはねえでしょ。さらし、「嘘のかたま  
り」「伽羅の香り」。もはや草月ホール  
は、完全に江戸と化していた。どこか  
で「慮外ながら……」と啖呵を切る揚  
巻の声すら聞こえてきそう。締めは  
「小唄・吉三節分」。「月も朧に白魚の  
かがりも霞む香の夜に……」。この選曲  
この並び。美紗の会のみなさんなら、  
これがどれほどの「粋」であることが、



十分におわかりいただけると思う。

みぞれ降る夜の赤坂の

浮世草子か夢枕

凜と響くは西松の

布咏の艶は華で色

連塾の第一部終了後、われわれが持ち込んだ師匠の三十枚のCDは、半分以上が瞬く間に売れてしまったこと。そして、連塾が終演した五分後には、残りのすべても早々に完売してしまっただこと。さらにその後も、師匠のCDを求めるゲストが多数、われわれの販売ブースに押しかけてこられたことを併せて申し述べておきます。

まったく、じいっつあ、春から縁起がいいわね。

雪は熱くて冷たくて

「第四回虹の会——」のかたち

ヤリタ ミサ

雪は冷たい。が触れる瞬間その冷たさは、熱いのと同じ。そんな感覚を覚える夜だった。以前にもいろいろな感情が溶け込んだ「闇」の豊穡さを書いたが、今回もその感覚はベースにめぐる。その濃密な闇を背景に、静かに強く浮かび上がってくるイメージは「雪」だ。能楽堂の光の当たる舞台と、それ以外の空間の闇との対比がその感覚を強めているかもしれない。

「雪」という表象は白くて純粹で冷たい。が実は、熱量の変化を経ている



いろなものを溶かし込んでいます。つまり、空気中の水蒸気が上空で大気中の塵などを核にして氷の結晶になり、それが溶けて雪になるのであるから、比喩的に言つと、人間の感情のゆらぎから立ち上る空気が冷却されて、偶然何かのきっかけで結晶化され、その後また涙のように溶けてくる。そのような感情の動きの表象に思える。

地唄「黒髪」の最後の詞「白雪」、西松布咏さんの声の母音部分が伸びている。私は「憂き」に懸けているように聞こえた。「憂き人」とはつれない恋人のことだから、雪に対して、自分の手の中から逃げる冷たい恋人のようだと思き、また自分の憂いの涙のようだ、とも解釈できる。もうひとつの地唄「ゆき」はタイトルそのものが雪で、「雪」

「憂き」のふたつの詞が出てくる。「浮世」とは「憂き世」のことであり、男女の恋のままならぬ現世という意味だ。これも雪のような純粹さを志向しつつも、憂いに満ちた恋心と悲しい現実とをダブルバインド状態で抱え込んでいる。矛盾する思いをそのままに揺れ動く心、それを表現できる三味線と唄は、

明暗のはっきりした西洋文化の光ではなくて、陰翳のニュアンスを表現する。好きか嫌いかどうか一方ではなく、好きも嫌いもどっちもある、というアンビバレントを保持できるのだ。男女の愛憎や人間関係の複雑さ、そして社会的階級や経済要因もからんだうえでの人間の感情は、一瞬でさえも重層的だし、長時間のスパンでは揺らいだり変化したりするものだ。布咏さんの声の表情は驚りもあれば悲しみも含み、抑制しようとする感情の中に喜びや快楽も垣間見え、明確に自分を主張する西洋の音楽とは違って、自分自身の内面へ向く方向性を持ちつつ、三味線の音とともにため息のように外界へそっと表出してゆく。

中村明一さんの尺八は、風の音であると同時に木々の音であり人間の心象でもある。時に人の気配、時にナレーション、時に効果音のように、ひとつの管楽器だけとは思えないほど多様な表現だ。広大な風景や孤独な心理が浮かび上がってくる。シンセサイザーのような電子楽器の音よりも多彩な音像が見える。三味線や尺八という楽器は、弦の擦れる音、撥の打音、呼吸の音、といった西洋音楽では楽音とされない音が表現の表情を豊かにしている。今

を唄いつつ、未来を案じて不安になり、過去の恋人を思って少しだけ幸せになり、でもまた……と、逡巡する心理。ためらい、揺れ動くもの。

田中優子さんがお話しされたように、江戸の遊女はある面では文化人だった音楽や舞踊などの芸術文化の実践者として、ミュージシャン兼ダンサー兼モデル兼アイドルとでもいうべきか。また別な面では自分の意志を率直に表現できる自立した女でもあった。そして、吉原が不夜城のように明るかったのは庶民の町が行灯だったのに対して吉原はろうそくだったから、と田中さんが説明された。以前にも江戸の唄や三味線は前衛だったとお話されたことを思い出す。

それにしても、花柳千寿文さんの「黒髪」の踊りは切々とするものがあった。行灯の明かり、手に持つ文、首のほんの少しの曲げ方、背中表情、このようなミニマルな細やかさから女心が直接に伝わってくる。今を感じつつ過去と未来への思いが切れ切れに出てくるこの心理描写は、時計の進行に合わせるのではなく内面の時間を描くという意味で、ウァーシニア・ウルフの「意識の流れ」の手法と同じだ。それに加えて布咏さんの唄は、踊りと一体になったアートである。相反する感情や、揺れ動く心理の陰翳が、精緻に描かれていく。

ドライアイスが燃えるような冷たさゆえ、熱く感じるように、心の「憂き」を揺れ動きながら感覚する夜だった。

## 思考の地図

「第六回季の会―四畳半から宇宙へ」

照沼 太佳子

精進料理で有名な原宿「月心居」で、布  
詠師匠が四季折々の唄を紡ぐ「季（とき）  
の会」。この素敵な趣向が始まったのは昨年、  
平成十八年の四月だった。桜の美しい季節、  
いくつが経緯があつて、布詠師匠の最初の  
試みに一曲、共演させていただけることにな  
った。店の敷居をまたいですべ、その店  
と主の厳しいたたずまいを感受。おまけに  
「精進料理」の「精進」の二文字がいやお  
うにも目にはいる。「すみません、まだまだ  
精進が・・・」独り言をつい口走ってしま  
っていた。場所にもまれ、唄いながら疲が  
からまるという恥ずかしい経験をしたのも  
この時だった。お料理は噂とおりの素晴ら  
しき、同時にその空間での師匠の糸の響き  
がまた格別にいい。それでも気落ちした苦  
い思い出ばかりが蘇る。

一年を振り返るにはまだ早いが、二〇〇  
七年は本当に多忙な年であった。例年の仕  
事に、海外での展覧会が三つ増えた。設立  
以来、中心になって活動を支えてきたデザ  
イナーの団体が二十周年を迎え、その記念  
事業も重なった。ことに十月は韓国での展  
覧会に始まり怒濤のような一ヶ月。やり切  
れるだろうか、他人事のようにつづやくほ  
ど、仕事が重なっていた。しかしその中に  
あって、死んでもやらなければと決めてい  
たことがある。それは毎年十月にその団体  
が主催しているデザイン国際コンペに審  
査員として参加してくれている一人のイギ  
リス人に恩返しをしたいということだった。

彼の名前はジョン・ワーウィッカー。日  
本ではテレビ朝日のＣＯや、ソニーのＶＩ  
などの仕事でも知られるデザイナー集団  
「tomato」のリーダーだ。ニューヨーク  
のセントラルパークをうめつくす世界的な  
音楽グループ「アンダーワールド」のプロ  
デューサー的な立場の人でもあり、来日す  
れば某有名代理店の社長クラスがホテルを  
訪ねるやり手のビジネスマンでもある。し  
かし私たちデザイナーグループと一緒にい  
る時の彼は、信じられないほど謙虚な一人  
の表現者になる。哲学者であり、思想家で  
あり、詩人でもある。その彼が、数年前に  
移住したメルボルンで、この春、私たちの  
展覧会を実現してくれた。そして深夜にま  
さに世界を動かすような仕事をしながら、  
一睡もせず、朝から夜まで言葉に言い尽く  
せないあたたかい趣向で私たちを歓待して  
くれたのだ。

稽古の折々に、私はこの素晴らしい人物  
と、彼から受けた恩義を師匠にお話してき  
た。そしていつか機会があれば、師匠の芸  
術を彼に披露したいとお伝えしてきた。

それが二〇〇七年秋の「季の会」で現実に  
なったのだ。十二月の大きな舞台を前に、  
秋の「季の会」をお休みしようかと迷われ  
ていた師匠に、「私に仕切らせていただけな  
いか」と懇願し、願いを叶えていただいた  
のである。伊勢さんをはじめ、デザイナー  
仲間にも声をかけた。とくに日頃邦楽に縁の  
ない、ロック音楽の仕事も多く手掛ける若  
いデザイナーをたくさん招いた。香港のデ  
ザイナーや、また世話になっている企業人  
もほんの少数お招きした。その一人は舟橋  
聖一氏のお孫さんで、子供の頃、家に三味  
線の音がいつもあったと聞いていたので、  
お招きすることにしたのだ。デザイン界の

ボス、浅葉克己さんも、みなで見ようと歌  
麿の「春画」を持ってやって来てくれた。  
「季の会」の貸し切り。なんとせいたくな  
ことだろう。他のみなさまにお小言をいた  
だくようなことだと思ふ。小さな不安もあ  
った。さまざま芸術に精通している人たち  
だが、邦楽に元々関心があるのはほんの一  
部。ジョンにしても各国の文化に広い見識  
をもっており、浮世絵にインスパイヤーさ  
れた「フローティング・ワールド」という  
本も出版しているが、なにしろ世界でも先  
鋭の電子音楽に関係している。何万という  
若者たちを一気に陶醉させ、踊らせるその  
場所に私は立ち会ったことがある。豊での  
五十分の演奏に耐えられるだろうか。

しかしそんな心配はまったく不要だった。  
並木駒形で始まった師匠の演奏、流れのす  
ばらしい選曲と合間にはいる解説、目をつ  
びつて唄いあげた名曲「ゆき」。聞く側の緊  
張もとけることがない。暗闇の中で誰もが  
身動きせず、一音も立てず、最後まで聞き  
入っていた。私は途中で何度も目頭が熱く  
なった。魂がおりてきた演奏。このために  
ご準備いただいた、その時間が、師匠の声  
を聞けば手にとるように想像できる。あら  
ためて、西松布詠という芸術家に陶醉した  
忘れられない夜になった。若いデザイナー  
たちも興奮きみにそれぞれ評論家になって、  
微細な分析までしていた。

ジョンは、いわゆる日本びいき、日本の伝  
統文化なら何でもおもしろがる、という外  
国人でない。であるから余計に、彼がその  
感性をすべて動員して、布詠師匠が紡ぐ世  
界をどう感じ取るかとても興味があった。  
次の音がまったくどの空間に現れるか想像  
できない、と言いながら、心からこの場所  
を冒険していた。布詠師匠に通訳まじえて

話し始めたなら止まらなくなっ  
た。幸せな感動の夜だったと  
帰り道で話してくれた。彼は  
「プロセス」あるいは「旅」  
という言葉をよく使う。旅の  
途中で次々に変わる思考の地  
図を、テキストとデザインで  
表現する。それはまるで楽譜  
のようだ。その地図に、この  
夜がどのように唄われて行く  
のか、また楽しみになった。



■たより第58号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三二二二

白金台プレイス三階

電話 (三四四一)二七二六

(五四四七)二四二二

<http://www.17.ocn.ne.jp/~misas/>